



先日、あるセミナーで米国のイエローストーン国立公園のオオカミ再導入の話聞いた。

世界で初めて国立公園に認定されたことで知られるイエローストーン国立公園で記録に残っている最後のオオカミが殺されたのは、公式記録によれば1926年というから、およそ100年前に公園内のオオカミは絶滅したことになる。

天敵となるオオカミが絶滅してしまつたことから、植物を食料とするシカが大繁殖し、その結果多くの植物が食べ尽くされてしまつたのだという。

そこで、カナダからオオカミを輸送して自然の中に放つ「オオカミの再導入」が行われ、イエローストーン国立公園の生態系が復活したというのだ。

当初はわずかな個体数だつたとしても、シカの天敵であるオオカミが生息するようになったことで、シカの個体数が減るだけでなく、オオカミに追い詰められやすい場所を避けてシカが生息するようになり、さらにシカが植物を食い尽くすことがなくなったこと

で、植物の再生は早まり、結果的に森ができるのと渡り鳥などの数が増え、木を食べるビーバーの数が増え、ビーバーが作ったダムがカワウソやカモなどの生息地になるなど、生態系の連鎖が復活したというのだ。さらに、復活したオオカミがコヨーテの数を減らしたこと、ウサギやネズミが増え、それらを狩るタカやイタチ、キツネ、アナグマが増える、といった効果もあつたという。

さらに再生した森の作用により、川の蛇行や地面への浸食が減り、川幅は狭くなり、水たまりは増え、水の豊かな野生動物にとつて絶好の生息地となったという。

もちろん、この結果と学説については、様々な見解があり、イエローストーン国立公園の食物連鎖はかなり複雑であり、肉食動物もクマやピューマなど数多くいることから、オオカミはシカに対する脅威としてはわずかな役割しか果たしていないとする説など議論白出の感があるが、少なくとも世界最古の国立公園の生態系が再生されたことは確かで、喜ばしいことだと思う。

こうして様々な意見や見解が示され、多くの人々が丁寧な発止と議論する

ことこそ大切なのであり、本誌の誌名の元となつている「万機公論に決すべし」はまさにそうした姿を顕している。昨今、国会内で取り沙汰されている「政治資金規正法」改正案の議論を見ると、この公の場で意見を戦わせるという本来あるべき姿勢が欠如しているように思えて仕方がない。

そもそも国会議員とは公人であり、少なくとも私生活以外の部分ではガラス張りであるべきだと思うのだが、2024年6月6日の国会内での質問に答えた法案提出者である自民党の鈴木馨祐氏は「プライバシー、企業団体の秘密保護は考慮しなくてはいけない」と答弁するし、遡つて2024年2月5日には岸田首相自らも「党の活動と関わる個人のプライバシーや企業団体の営業秘密を侵害する。党方針が他の政治勢力や諸外国に明らかになる」と発言している。

そもそも代議士自身が自らを律することが前提で、私腹を肥やす心配がないなら「政治資金規正法」など無用であるはずだ。

与野党ともども、自覚と綱紀粛正をお願いしたい。

(溪)

月刊 公論

7月号 第57巻7号

令和6年7月1日発行 毎月20日発売
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大中 吉一 編集人 林 溪清
発行所 株式会社財界通信社
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラワービル
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616
印刷所 株式会社広済堂ネクスト
取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。